

「尾高賞」受賞作を
Music Tomorrow 2020で再演！
作曲者のコメント・選考評を紹介

2020年2月に「第68回尾高賞」を受賞した細川俊夫《オーケストラのための「渦」(2019)》が、N響特別公演「Music Tomorrow 2020」で再演されます。尾高賞受賞コメントと審査員選考評を紹介します。

Music Tomorrow 2020

2020年5月4日(月・祝) 開演 4:00pm

東京オペラシティ コンサートホール

西村 朗／華開世界～オーケストラのための(2020)

[NHK交響楽団委嘱作品・世界初演]

レシュノフ／ヴァイオリンと管弦楽のための室内協奏曲(2015)[日本初演]

サロネン／ニクス(2011)[日本初演]

細川俊夫／オーケストラのための「渦」(2019)[第68回尾高賞受賞作品]

指揮：ロバート・スパーノ

ヴァイオリン：ノア・ベンディックス・バルグリー

公演の詳細はこちら

<https://www.nhkso.or.jp/concert/20200504.html>

『第68回尾高賞 受賞によせて』

細川俊夫

今回は私のオーケストラのための「渦」に尾高賞を与えてくださりまして、審査員の皆さまとNHK交響楽団に心から感謝申し上げます。

この作品は、サントリーホール、ソチ冬の芸術祭、エッセン・フィルハーモニーの共同委嘱作品として、2019年の2月から約半年をかけて作曲しました。2017年12月、パリのアンサンブル・アンテルコンタンポランで初演した《オペラ「二人静」(海から来た少女)》、2018年の7月にシュトゥットガルト歌劇場で初演した《オペラ「地震・夢」》と、私にとってとても重要なオペラの仕事が二つ続き、2018年は疲労困憊していました。《「二人静」》は難民の問題、《「地震・夢」》は、自然災害の後の人間が引き起こすカタストロフィーがテーマでした。その重いテーマに向かいあったことで、私自身が精神的に消耗し、未来が見えない状態に陥ってしまいました。それで約半年休みを取り、その間、自然の美しいところに行ったり、読書をしたりして、少し音楽から離れた生活をしました。その休みの後に作曲した最初の大きな作品が、この《オーケストラのための「渦」》です。

この作品では、音響が海の波のように、クレッシェンド、デクレッシェンドで聴衆に押し寄せてきます。その波動はあたかも人間の呼吸のように、吐いては吸っていく円環運動を持っています。その一息一息が深みからやってきて、しかも毎回世界が新しく創造される。そのような、ゆったりとした大きな息がしたい。それが渦となって、聴衆を包み込んでゆく。そしてその息は、悲しみのため息ばかりではなくて、復活の新しいのちの胎動でもある。そのようなイメージを持って作曲したこの《「渦」》は、自分自身の自己回復への願いと祈りを込めた作品です。

この作品が、このような賞をいただき、また何より素晴らしいNHK交響楽団によって再演されることが、私にとっては大きな喜びです。関係者の皆さんに、心からの感謝を捧げます。

(ほそかわ・としお／作曲家)

プロフィール

細川俊夫

1955年10月23日、広島生まれ。1976年から10年間ドイツ留学。ベルリン芸術大学でユン・イサンに、フライブルク音楽大学でクラウス・フーバーに作曲を師事。

1980年、ダルムシュタット国際現代音楽夏期講習に初めて参加、作品を発表する。以降、ヨーロッパと日本を中心に、作曲活動を展開。日本を代表する作曲家として、欧米の主要なオーケストラ、音楽祭、オペラ劇場等から次々と委嘱を受け、国際的に高い評価を得ている。2004年のエクサンプロヴァンス音楽祭の委嘱による2作目の《オペラ「班女」》(演出=アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル)、2005年のザルツブルク音楽祭委嘱のオーケストラ作品《循環する海》(世界初演=ウィーン・フィル)、第5回ロシュ・コミッション(2008年)受賞による委嘱作品である2010年世界初演のオーケストラのための《夢を織る》(クリーヴランド管弦楽団によって、ルツェルン音楽祭、カーネギーホール等で初演)、2011年のモネ劇場の委嘱による《オペラ「松風」》(演出=サシャ・ヴァルツ)、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団とバービカン・センター、コンセルトヘボウの共同委嘱による《ホルン協奏曲―開花の時―》といった作品は、大野和士、ヴァレリー・ゲルギエフ、フランツ・ウェルザー・メスト、サイモン・ラトルなど、世界一流の指揮者たちによって初演され、その多くはすでにそれぞれのジャンルにおけるレパートリーとして演奏され続けている。

2013年のザルツブルク音楽祭では、テーマ作曲家として二度目となる同音楽祭委嘱作品、《ソプラノとオーケストラのための「嘆き」》の初演をはじめ、アンサンブル・ウィーン・ベルリン委嘱作品《古代の声》の初演ほか、多くの作品が演奏された。

2001年にドイツ・ベルリンの芸術アカデミー会員に選ばれる。東京交響楽団(1998-2007)、ベルリン・ドイツ交響楽団(2006/2007シーズン)、および西ドイツ放送局合唱団(2006~2008シーズン)のコンポーザー・イン・レジデンスを歴任。2006/2007シーズンおよび2008/2009シーズン、ベルリン高等研究所からフェロー(特別研究員)として招待され、ベルリンに滞在。2012年にはドイツ・バイエルン芸術アカデミーの会員に選出された。2012年秋、紫綬褒章を受章。また2013年、《夢を織る》で英国作曲家賞を受賞。2013/2014シーズン、オランダ・フィルハーモニー管弦楽団のコンポーザー・イン・レジデンス。2019年より広島交響楽団、コンポーザー・イン・レジデンス。

現在、武生国際音楽祭音楽監督、東京音楽大学およびエリザベト音楽大学客員教授。

『第68回尾高賞』選考評

外山雄三

候補作品全18曲を丁寧に聴いた。楽譜にも目を通した。どれも力作揃いである。

受賞曲、細川俊夫さんの《オーケストラのための「渦」》(2019)は作品の内容よりもオーケストラを思い通りに鳴らす技術だけが先行したかと思いかけたが、そのようなことはなく、実に濃密な内容をじっくり語り尽くそうという作者の率直なエネルギーが聴くものに迫る。様々な装飾を散りばめる可能性も存在した筈だが、それを全て捨てて、ただひたすら現在の思いを表白する道を選んだ。このような姿勢は、作者たちの理想としては常に存在している筈だが、それを実現することは決して容易ではない。また率直さが、しばしば安易な、平板な表現と混同されがちであるが、そのような弱点も全く見出せない。細川さんがついにご自分が望んだ境地に立ったかと思いかけたが、まだまだ、これから更に豊かな高みを目指して仕事をなさる筈だ、と期待は膨らむばかりである。

受賞を逃した藤倉大さんの《オーケストラのためのUmi(海)》(旧名、ソラリス組曲)はオーケストラの鳴らし方を熟知した作者がオーケストラと戯れている趣きで、作者の意図が聴く者に伝わりにくい。

野平一郎さんの《〈断続する叫び〉サクソフォーンとピアノのための二重協奏曲》は様々な工夫を凝らして、平板な音響の連続になることを避けようとしたと考えられるが、その工夫が必ずしも成功していない部分が見られるのは残念である。

小鍛冶邦隆さんの《ブッファ／オーケストラ》は音響的な豊かさを求めて工夫を凝らした作品かと推察するが、やはり、それだけでは少々無理があるという印象を免れない。言いたいことを、真っ直ぐに言うことも作曲という仕事の中に当然含まれていることを、作者は知り尽くしておられる筈で、だから次作に期待したい。更に贅沢を言えば、もっと若い人たちにもどんどん作品を書いて欲しい。

(とやま・ゆうぞう／NHK交響楽団正指揮者)

『第68回尾高賞』選考評

尾高忠明

父の尚忠が亡くなったのが1951年2月16日なので、亡くなって69年ということになる。尾高賞も無事に68回を迎えることができ、息子として、関係各氏に心からの感謝の気持ちを持ち続けていると同時に、日本の音楽界の進歩に少しでもこの賞がお役に立ってほしいと心から願っている。

さて昨年は18作品がエントリーされた。自分はエントリーされてない作品がどの程度あるのか把握できていないが、出来ることならすべての作品を審査させていただければという気持ちも少なからずある。

今回、自分が素晴らしいと感じた作品は3作品だった。

そのうちの2作品が細川俊夫さんの《オーケストラのための「渦」》と《リートV～チェロと弦楽オーケストラ、打楽器、ハープのための》。そして酒井健治さんの《ヴィオラ協奏曲「ヒストリア」》だ。他にも野平一郎さん、藪田翔一さん、藤倉大さん、小出稚子さんそして望月京さんの作品に興味を覚えた。

《リートV》ではイッサーリスの圧倒的な演奏に唖然としたし、《ヒストリア》では小峰航一さんの素晴らしいソロに感激した。が、と同時に以前にも感じたが、ソロのあまりの素晴らしさ故の、再演の難しさも感じてしまった。

今回の尾高賞に決定した《渦》は紛れもない立派な作品だ。既に3回その作品が受賞なさっていらっしゃる細川さんが、まさに脂の乗り切った素敵な空間を作り上げてくださった。自分は聞いていて音だけでこのように渦を表現することができた作曲家と、それを見事に再現した杉山洋一さん指揮の東京都交響楽団に大きな拍手を送りたい。

(おたか・ただあき／NHK交響楽団正指揮者)

『第68回尾高賞』選考評

片山杜秀

《渦》というタイトルは伊達ではありません。オーケストラが本当に響きの渦を巻くのです。具体的に申せば、オーケストラのもろもろの楽器には、通常の配置、普段のまとまりとは異なる、この曲独自のグルーピングがされています。舞台からはみだしたところに配置される別動隊も居ます。現代音楽には珍しいことではありませんが、配置に関する、この曲独特のこだわりが、アイデア倒れに終わらず、とてもよく生きている。たとえば、まず向かって左側から聴こえてきた音型や音のうねりが、少し遅れて奥の方から、さらに少し遅れて右から聴こえてきたりする。「左→奥→右」と音が回る。一種のカノンのようなことですが、そうやって水の渦や空気の渦でなく音楽の渦が体験され続けるのです。

この曲は小さな渦をたくさん作り続けて生成と流動と変転を繰り返しながらぐるぐる回り続けますけれども、聴きよう・取りようによりけりですが、全体で初演の演奏だと約25分切れ目なく続くうち、だいたい5分弱見当で、性格の違う5つの大きな渦巻きが連なってゆくように、私には聴こえます。どの大きな渦も序破急の要領で出来ていて、だんだん盛り上がり、緊張を強め、音量も大きくし、音符も増え、たいがい金管楽器の響きを主体とする怒濤の渦巻きで、序破急の急の部分の頂点に達し、そこから静まって、次の渦の序に移行してゆく。そして、それぞれの大渦はどれもよくキャラクターが立っています。同じような渦の繰り返しでは、すぐ飽きてしまうかもしれませんが、劇的な絵巻物のようにどんどん趣向が変わるのです。静謐かつ抽象的な弦楽器の持続音の上に雅やかに生動してゆく気品ある大渦もあれば、木管楽器による能管の絡み合うような音のしがらみにリードされて切迫してゆく情念漂う大渦もあります。

そして、4番目の大渦と私には数えられる、打楽器群に導かれる渦は、演奏によっては祭礼的にも響きうるかもしれませんが、やはり破局的に乱流を巻き起こしてゆくような大渦となって、全曲のピークを作り、そのあとの最後の渦は、木管楽器の鳥の声と本物の水の音によるユートピア的な渦であって、大いなる浄化がもたらされます。

この大渦の連鎖から、われわれは世界の諸相を聴きとれるでしょう。秩序ある渦にケプラーの思い描いた宇宙のようなこの世界の荘厳さを感じ取れるかもしれませんが、無秩序な渦に津波の災禍の痛みを思うかもしれませんが、ユートピア的な音の渦に巻き込まれながら救済を願うでしょう。この作品においては、細川さん

の技と思想は完璧に一致しています。音の渦を作る職人芸と渦の表象する哲学の間にすきがないということです。これは凄いことで、細川さんの巨匠性の証でしょう。もうひとつ言うと、回転する音の渦を活かした作品によって大きな世界を表徴しようとする意欲とは、細川さんの師匠のクラウス・フーバーの示し続けていたものでしょう。細川さんは師の衣鉢をよく継いで、見事に個性化していると思いました。尾高賞に相応しい名作です。

あと、酒井健治さんの《ヴィオラ協奏曲「ヒストリア」》と、藤倉大さんの《オーケストラのためのUmi海》及び《三味線協奏曲》も素晴らしい。そう付け加えておきます。

(かたやま・もりひで／音楽評論家)